

妙安寺だより 298号

端午の節句

桜の季節も終わり、新緑の香る時期となりました。

昔から日本では、「正・五・九月」といって、五月は一年のうちでも大切な月とされ、旧暦の五月は、田植えの月であり、田の神を迎えて祀る月でした。

この日はもともと娘たちの節句だったのです。五月という月は「さつきいみ」といって、田植えに伴う物忌みの時期で、早乙女は家にこもって神を祀っていました。

菖蒲の葉や蓬（よもぎ）などで屋根を葺き、娘たちはその中にこもって、身を清めたので、「菖蒲の宿」ともいい、この日を「菖蒲の節句」とも呼ぶようになりました。

ところが、この「菖蒲」が「尚武」と同音のため、「武を尚ぶ（ぶをとうとぶ）」というところから、五節句の一つだけを男に廻してもらったことになったのです。

「端午の節句」というのは、もともと中国のもので、「端」は初めての意味で、「午」は五月の初めての「午（うま）」の日のことで、五日とは限りませんでした。それが、漢代以後に、「午」が「五」に通じ、また五が重なるところから五月五日になったということです。

三月の節句には内裏雛（だいらびな）という決まった形式がありましたが、五月の節句には、これという決まりはなく、鐘馗様（しょうきさま）が多く飾られました。

鐘馗様は、中国の伝説上の人物で、悪魔を滅ぼしたということから、魔よけの神様にされ、鬼を退治するような強い力を、子供に与えてもらいたいという願いをこめて、鐘馗様の人形がもてはやされたのです。

また、三月の節句は、家族の人形を作ってお祓いをするのに対し、五月の節句には、家の門口に紙で作った鎧兜（よろいかぶと）や旗差し物などを並べて、男の武運長久と同時に、家の繁栄を祈ったのです。

要するに、五月の節句の飾り物は、全部が戦（いくさ）の道具に関連して出来たもので、男子の幸福を祈るという気持ちが込められていたのです。

※五節句＝一年間の主要な五つの節句。

人日（じんじつ＝正月七日） 上巳（じょうし＝三月三日） 端午（たんご＝五月五日）

七夕（たなばた＝七月七日） 重陽（ちょうよう＝九月九日）をいう。

虫のいのち

小さな虫を救うても	救う生命は只一つ	象の生命を助けても	助けた生命は只一つ
虫でも象でも救われた	その有り難さは変わらない	虫でも象でも同様に	助けた心の美しさ
人の生命を助くるは	人の心を持った人	虫の生命を助くるは	神の心を持った人
みんな仕えよ神様に	御礼申せよ神様に		（夢野久作「虫の生命」より）

人間は、鬼の心、修羅の心、人間の心、神の心、仏の心を、皆持っています。

鬼の心を持つ人間は、仏の心を持っていないかといえばそうではなく、また、逆に仏の心を持つ人でも、状況（縁）によっては鬼の心を持ってしまいます。

「私は、今何の心を持っている？」と、自分に問いかけ、気をつけることが大切です。

笑の泉

◎貧乏神と福の神

ある用事があって歩いていると、向こうから口の悪い友達がやってきた。

「おい、貧乏神どこへ行くんだ」と声をかけられたので、「うん、お前の家に行くところだ」とウソをついた。

「来なくていい。来ても俺はいないぞ」という返事が返ってきた。

用事を済ませて帰る途中、その友達にまた逢った。

友達は、貧乏神に来られるのは縁起でもないと思ったのか、丁寧に、

「さっきは失礼しました福の神様、うちに来られるところですか」というので、

「ああ、たった今、お前の家から出てきたところだ」と答えてやった。

